

令和3年度 第1回
大阪府泉佐野丘陵緑地 運営審議会

日時：令和4年3月3日（木）10:00～12:00

場所：パークセンター（Web会議併用）

◆出席者（敬称略）

- ・大阪府立大学 名誉教授 増田昇
- ・元大阪府立大学大学院 教授 前中久行
- ・大阪府立大学大学院 准教授 武田重昭
- ・大阪府立大学大学院 助教授 上田萌子
- ・大阪府立大学 助教 阿久井康平
- ・和歌山大学 教授 堀田祐三子
- ・大輪会事務局長 石井潤詞
- ・泉佐野丘陵緑地パーククラブ 代表 久住和茂
- ・泉佐野丘陵緑地パーククラブ 副代表 小門豊
- ・泉佐野丘陵緑地パーククラブ 事務局長 那須利之
- ・事務局（大阪府）

◆欠席者（敬称略）

- ・泉佐野市 都市整備部部長 家治元和

◆現地傍聴者

- ・1名

◆概要

1. 来年度の方向性について
 - ①令和3年度の活動報告
 - ②令和4年度の活動の方向性について
2. その他
 - ①パークセンターの改修について

1 来年度の活動の方向性について

① 令和3年度の活動報告

●パーククラブの活動報告

- ・ 新型コロナウイルス感染拡大の影響で制約も受けながらも、パーククラブの活動日数は113日ということで、活発である。
- ・ パーククラブの高齢化の課題はあるが、養成講座より9名の方が新たに加入したということで、一定のメンバー数を維持できているといえるだろう。
- ・ パーククラブの活動への参加が年1～2回というメンバーに対して、「よく来てくれました賞」を出すなど、活動の参加頻度には多様性を維持しておくことが重要である。
- ・ 女性の活動が増えてきているのは良い傾向である。

●持込み型プログラム・パークレンジャー養成講座の活動報告

- ・ えんづくりプログラムの募集方法を随時募集に変更したことは、効果的。今年度、プログラムに登録した新規団体の登録のきっかけと普段の活動を教えてほしい。
 - 「Saya Yoga」は、以前実施したヨガのプログラムの先生からの紹介である。
 - 「AKC factory」、「森のささやき」は大阪府職員が趣味の延長としてプログラムを実施している。「gift guilt free」は泉佐野丘陵緑地のホームページでえんづくりプログラムを知った。
- ・ 「泉佐野青年会議所」とのコラボ企画は、公園の特性を活かして、地元の青年や子どもたちに趣旨を理解してもらいながらプログラムが実施できている。横展開として他の青年会議所ともコラボしてほしい。この取組みは大輪会でも紹介したい。

② 令和4年度の活動の方向性について

●パーククラブの活動の方向性

- ・ 地域性種苗や育苗の知識が必要ということで、兵庫県尼崎市の尼崎の森中央緑地では、それらの活動を市民参画で進めている。パーククラブで視察に行くのはどうか。
 - 4年前にパーククラブで視察済。尼崎の森中央緑地では100年の森づくりとして長期の計画が進んでおり、専門業者がサポートしている。泉佐野丘陵緑地でそのようなサポートを受けることは難しいだろう。
- ・ 育苗などのアドバイスは、求められたらいつでも対応する。泉佐野丘陵緑地の活動は、基本的にはみんなで考えるという方針である。専門家から積極的に何かしようと提案するのではなく、パーククラブの要望に応じてアドバイスしていく。
- ・ 棚田チームの「おとなの農業」は、チャレンジとしては非常に良い。お客さんとして棚

田に関わってもらうのではなく、より主体性を持った人に関わってもらうことは大切である。ただ、参加者への広報や取組みを説明する時は気をつける必要がある。パーククラブの長年の蓄積を共有することや、郷の風景をどうつくっていくか、収穫した農作物の扱い方などは、初回案内時等にしっかりと説明する必要がある。最初にボタンの掛け違いがあると公園の趣旨と外れた活動となり、ただ単に農業をすることになる。

- ・ 「おとなの農業」というタイトルが気になる。家族を対象にするのであれば、「家族の農業」とするのはどうか。また、1年間のスケジュールがわかる歳時記などを作っておくとよいだろう。
 - 「おとなの農業」の「おとな」には、主体性のある人に参加してもらいたいという意図を込めている。例えば、何を植えるか、どのような段取りで進めるかについても、パーククラブはアドバイスをするが、決定するのは参加者である。棚田の使い方から考えてもらい、それをパーククラブがフォローしていく。パーククラブとしても初の試みとなるので、トライアンドエラーをしながら進めたい。
- ・ 大人だから責任を持つ必要があるのではなく、子どもでも責任を持つ必要がある。お客さんとして参加してもらうのではなく、年間を通じて公園で活動する主体者として参加してもらいたいというメッセージを伝えてはどうか。
- ・ 「おとなの農業」という言葉が気になっていた。近年、若い人も農業への関心が高まっている。主体的に責任を持ち、公園のコンセプトを理解しながら棚田の利用に関わってもらうことを前提に、家族に限らず、単身の方や若い方々にも対象を広げるのはどうか。
- ・ 広く可能性があるので、棚田チームでも様々な可能性を検討してもらいたい。
 - 「おとなの農業」については、棚田チームとも調整しながら進めているが、「おとなの農業」という名前で泉佐野市市報に掲載予定。
- ・ 対応可能な委員はメールでアドバイスすることもできる。「おとなの農業」のような募集チラシは、文言の修正が可能な段階で委員にメールで相談してもらいたい。
- ・ 「おとなの農業」の年間スケジュールなどを作り、運営審議会で議題として挙げてもらえば、色んな視点からアドバイスすることができる。運営審議会はアドバイザーボードであり、悩んでいることがあれば事務局を通じて投げかけてもらい、委員からアドバイスをするという形で進めたい。
 - 「おとなの農業」は作成中のチラシをメールで委員のみなさんにお送りし、ご意見をいただくようにする。
- ・ 棚田チームのリーダーがいない状況からデメリットは生じてないか。運営はどのように進めているか。
 - 棚田チームのメンバー数は18名だが、頻繁に活動に参加するのは10名程度。棚田チームのリーダーが年度途中での退任となり、棚田チームのみで棚田を維持することが難しくなってきた。そこで今回の「おとなの農業」プログラムのよう

な、外部の人と一緒にやるという構想が出てきた。

- ・ 棚田保全のレベルも様々である。「おとなの農業」を通してどんなスキルを得られるのか、教えてほしい。
 - 水田環境を維持することがパーククラブの第一目標だが、「おとなの農業」参加者にはある程度、収穫もしてもらいたい。パーククラブのなかに稲作の経験者はいるので、知識としてアドバイスすることは可能である。
- ・ 「おとなの農業」参加者は収穫による販売を目的としていないので、途中で枯れる、雑草に侵入されるといった経験をしてもいいのではないか。
- ・ 「おとなの農業」の目的として、棚田の保全が前面に出ると参加者は抵抗を感じる可能性がある。参加を通じて結果的に棚田や風景の保全につながるということがわかれば、シビックプライドの醸成にもつながる。また、客体から主体になり、そこからパーククラブへと興味を持ってもらえるようなプログラムを水面下で想定しておくことも必要だろう。スカウトのような仕組みも必要になるかもしれない。
- ・ てっぺん広場は開設後、10年近く経過しているが、現状では何も生えていない土地。芝生を求めることが適切ではない土壌である可能性や、樹木が光を遮っている可能性がある。その土地の条件を考慮したうえで、人が立ち入る芝生や見通し、あるいは植樹など、適切にゾーニングしていく必要がある。
 - 承知した。パーククラブとしては、てっぺん広場は眺望の確保をまず優先する。
- ・ 竹林の整備・維持管理がパーククラブの過度な負担であるならば、予算をつけて専門家にも対応してもらうことを大阪府として進めることは可能か。
 - コラボレーション区域は府民と一緒につくっていくエリアであり、パーククラブに限らず他の団体とも協働しながら竹林の管理を進めたい。大阪府の予算は樹木の伐採や園路沿いの危険な木の管理等に使用している。今年度はパーククラブからの要請で、谷口池の湿地の竹林伐採を行っている。
- ・ ルートマップのさらなる活用など、今年度のパーククラブの成果をどう継続させてバージョンアップしていくのか？園内の活動マップを作り、その日の活動内容が、来園者にとって効果的な情報提供となる。棚田半島は「また来たくなる公園」の方針に沿ってどう整備を進めていくのかを教えてほしい。
 - 園内の活動マップは掲示していない。ただ、半月ごとに各チームの見どころの写真を掲示し、来園者に対する情報提供や、チーム間の情報共有にも役立っている。
- ・ クラブ全体として「また来たくなる公園」をどう展開するかについて、さらに検討してもらいたい。
 - 新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、多くの議論ができていない。
- ・ ほかの施設はリモートを意識したプログラムを展開している。例えば、リモート型の見学会や園内案内、学習会などに取組んでいる。泉佐野丘陵緑地でもリモート型の情報発

信やイベントに取り組んでいきたい。他の大阪府営公園でもリモート型のプログラムを提供している。

→ 来年度に向けて検討したい。

- ・ 運営審議会などの会議は、リモートと現地の併用開催は常態化することになるので、リモートに合わせた資料作りや会議の開催方法などの技術を蓄積してもらいたい。
- ・ 来年度の活動の方向性はパーククラブだけでなく、大阪府が担当するプログラムの方向性も示してもらいたい。
- ・ 大阪府とパーククラブはパートナーシップを結んで活動を進めている。パーククラブだけが活動方針を示すのではなく、パートナーとして、あるいは管理者や行政としての方針も必要である。公園をどのような方向へバージョンアップしたいと考えているのか、提案してもらいたい。

→ パーククラブとも調整しながら次の展開を考えたい。

● 「天神川流域整備チーム活動」エリア開放に向けて

- ・ 大阪府が危険個所に転落防止のための安全柵を設置することにより、安全を担保しながら開放することができる。引き続き検討を進めてもらいたい。

2 その他

① パークセンターの改修について

- ・ 改修については了解した。資料をわかりやすく工夫してもらいたい。